

迫害下のフランス改革派教会の歩み* (二)

—カミザールの戦いと荒野の教会—

森 川 甫

I. カミザールの戦い

ローマ教会の聖職者階級は「ナント勅令」廃止という王室の政策に協力し、新たに改宗した者に対して和解策を講じた。幾つかの教会で新約聖書朗読を試み、グルノーブルの司教はカトリックとプロテスタントの2種類の聖餐式を認めた。この政策は一部成功したが、しかし、「新改宗者」はこの和解策を暫定的なもの、不満足なものともみなした。1685年12月から1686年4月にかけて、さらに厳しい迫害がなされる。1687年1月22日、国王軍がニーム、セヴェヌ地方に派遣され、「徹底抵抗派」を撃滅しようとする。この強圧的改宗政策は広く承認されたものではなかった。徹底抵抗派には女性に対しても過酷な体刑を課した。コンスタンスの塔はその最も有名な例である。マリ・デュランはこの塔に38年間投獄された。徹底抵抗派を減らすために、財産没収、罰金、子攫い、家宅搜索、さまざまな侮辱、厳しい監視、病人に対する圧力などあらゆる種類の方策がとられる。¹⁾

初期の秘密集会は、「ナント勅令」廃止以前からさえも幾人かの牧師や説教師によって始められていた。そうした牧師、説教師の中で最も傑出したのは、フランソワ・ヴィヴァン²⁾であった。ラングドック県知事バヴィルはユグノーに対する弾圧を続けて来たが、執拗に抵抗する人々を平定できないので、説教師たちと交渉して、抵抗派を3百名国外に出ることを許可する約束をした。しかし、

知事は約束を守らず、全部で、67名しか認めなかったが、その中にヴィヴァンがいた。その他の人々はマルチニック諸島に流刑となった。

ヴィヴァンはオランダでジュリュウに会い、ついでスイスへ行った。そこで、この悲劇的な時代にあって、最も魅力的な人物の一人、クロード・ブルソン³⁾と知り合った。ブルソンは1647年ニームに生れ、法学博士となり、つねに改革派を弁護して来た。亡命することを余儀なくされ、ニームの街を下水道を通して脱出し、スイスにやって来たのであった。1689年、ヴィヴァンはブルソンや幾人かの説教師と共にフランスに帰った。彼らは秘密集会を開催した。一方、バヴィル知事はユグノー弾圧の熱心をさらに強め、山間街道筋にあたるニーム、アレス、サン・イポリットに要塞を構築し、軍隊を配置した。1688年8月25日、秘密集会が襲撃され、ユグノーが虐殺された。幾人かの説教師は拷問をうけ、貴族さえもカレー船に送られた。これに対して、ヴィヴァンは反撃を加えた。ヴィヴァンの首には5百リーブルの賞金がかげられた。彼は各地で秘密集会を開き、人々の信仰心を鼓舞した。しかし、同信を装った偽の兄弟に欺かれて、アンデューズの洞穴の中で虐殺された。

これらの迫害は、かえって、農民ユグノーの信仰の火を高揚させた。少年、少女たち、のちには、大人たちがうっとりとして「預言者」の声を聴いていた。10才の時、火事と虐殺の場面を見て、激しい影響を受けたドロームの羊飼いの娘、イザボー・ヴァンサン⁴⁾は、17才の時、眠りの状態で語り始め

*キーワード：ユグノー、迫害、改革派教会再建

1) Cf. Raoul STEPHAN, *Histoire du Protestantisme français*, 1961, Librairie Arthème Fayard, pp. 168-169.

マリ・デュランに関しては、cf. 本稿 p. 48.

2) François VIVENS (-1692)

3) Claude BROUSSON (1647-1698)

4) Isabeau VINCENT 牧師不在の状況のなかで、秘密集会では、「預言者」と呼ばれる人たちが霊的メッセージを語った。

た。その地方の方言しか話せなかった彼女が、優れたフランス語で話したといわれる。「夢遊症患者の眠りのなかで、彼女の顔は輝き、彼女の醜さは美しくなっていた。彼女は『美わしのイザボー』と呼ばれた。」余り一貫性はなかったが、彼女は聖書の文体で勧めをしていた。1688年6月8日、逮捕され、グルノーブルの修道院に閉じ込められた。彼女がその後どうなったかは分からないが、「預言者や女預言者がドーフィネ、ヴィヴァレ、とくに、セヴェヌ地方に急増した。」最も異常なことは、子供たちの預言である。彼らのメッセージは「悔い改め、決心、首尾一貫した深い喜びの生活」についてであった。病的なものがない超自然的な現象があり、より精密な研究に値するとプロテスタント主義の歴史家、レオナルドは指摘している。⁵⁾

外国の牧師たちは一般に、この天啓説を非難し、この天啓説はこれらの無教養な民衆が牧師を持っていなかった事実に帰した。この預言活動はプロテスタント教会によるものではないが、ミシュレー⁶⁾の注目を引いた。この預言活動は最も恐ろしい迫害下にある改革派信仰の維持に貢献したと言えよう。この預言活動が人々の心をとらえた時、彼らは良心によって、神を礼拝する権利を与えない権力に対して、武装し、抵抗活動へとすすんだ。ヴィヴァンやブルソンは外国に援助を求めた。しかし、ヴィヴァンは死に、他の人物がその代わりをする。

「預言者」は牧師ではないのでこの点は批判の余地があるが、激しい迫害の下で、農民たちが改革派信仰を保持することに大きな貢献をした。この「預言者」たちが農民の心をとらえ、組織化された時、カトリック教会、国家権力に対する武装されたレジスタンスとなったのである。⁷⁾

1702年7月23日、「預言者」の一人で、エスプリ・セギエと呼ばれていたピエール・セギエがブージュに40人の同信の友を集め、夜に入って、ボン・ド・モンヴェールのデュ・シェイル司祭館

を目指して行進する。この司祭は、かねてから、プロテスタントの男女を捕え、酒倉を牢獄にして彼らを収容し、ひげや眉毛をピンセットで抜いたり、真赤に燃えた炭火を手のひらの上におき、消えるまで握らせたり、油をしませた布で体をおおい、火をつけるなどの拷問をして、改宗を迫っていた。⁸⁾

セギエに従ったこの40人のユグノーがデュ・シェイラの司祭館を取り囲んだところ、館内から使用人の一人がユグノーに向かって発砲した。興奮したユグノーたちは館に押入り、牢獄に入れられていたユグノーを救い出し、逃げようとするデュ・シェイラ司祭を捕えて殺し、司祭館に放火した。この事件をきっかけに、2つのカトリック教会、3つの司祭館が焼かれ、11人のカトリック教徒が殺された。ユグノーの側も2人捕えられ、拷問にかけられた末、焼き殺された。

指導者のエスプリ・セギエも捕えられ、官憲の訊問をうける。

「お前の名前は？」「ピエール・セギエ。」

「何故、人々はお前をエスプリと呼ぶのか？」
「エスプリ（聖霊）が私に宿っているからだ。」

「お前の住所は？」「荒野だ。そして、将来は天国に住むだろう。」

「国王に赦免を願いなさい。」

「我々には神以外に王はない。」

「お前の犯した罪を悔いなさい。」

「わが魂は木蔭と泉にみちた主の庭に憩っている。」

反抗の火はがつき、直ちに、燃え広がって行った。カミザールの戦いは歴史のなかで最も驚くべき事実のひとつである。カミザールというこの言葉はどこから来ているのか。？余りよく分からない。このゲリラたちが着ていた白いシャツからであろうか。（オック語では *camiso*）カミザールという語は夜襲を意味しているのでであろうか？この大健脚家たちが走り回っていた起伏の多い道からであろうか。（*camins*）いずれにしても、ミ

5) Cf. *Revue historique*, octobre-décembre 1954, p. 303; R. STEPHAN, *op cit.*, p. 172.

6) Jule MICHELET (1798-1874) コレージュ・ド・フランスの教授。フランス史に関する数多くの優れた著作をしている。

7) Cf. R. STEPHAN, *op cit.*, p. 172.

8) Cf. *Ibid.*, p. 173.

シュレーは叫んでいる。「世界の歴史に類例のないことだ。」⁹⁾と。「私たちは叙情詩に引きずられないで、マルセル・パンの真摯な研究によって正確に捉えるように努めよう」¹⁰⁾とステファヌ・ラウールは言う。

まず第一に、外国からの有効な介入は何らなかったことである。バヴィル知事は、1702年8月4日、次のように宣言した。「これらの者の中には外国人は全くいない。」イギリス人はずっと後になってしかこの事件の重要性を理解していない。そして、カミザールがもはやいない1710年に上陸を試みたが、無駄なことであった。ヴィヴァンは外国からの助言と資金に支えられることができたが、カミザールたちは彼らを生気づける聖霊のみに服従した。彼らの抵抗は宗教的であった。彼らはお互いに「神の子」と呼んでいた。旧約聖書に養われて、彼らは選ばれた民であることを確信し、「犯した罪」と同等の刑を良心の呵責なしに、実行していた。彼らの教会堂が破壊されれば、カトリックの聖堂を焼いた。アブラハム・マゼル、サロモン・クッデルクとともに、暴動の先頭に立ったのは、ゲデオン・ラポルト¹¹⁾である。バヴィル知事はラポルトの首に賞金をかけ、犯罪が行なわれたら、共同責任であると宣告した。彼の義兄弟ド・ブログリ公爵は陣営を張り、ゲデオン・ラポルトとその仲間を不意打ちし、殺害した。13人の頭がアンデューズの広場でさらされた。この虐殺行為はセヴェンヌの人々を憤激させ、激しい戦闘が始まった。戦闘は2年間だけであったが、国王は精鋭の大軍を動員した。カトリック軍は3人の元帥、13人の将軍、2万5千人の正規兵によって構成され優れた兵器を装備して弾圧にやって来た。大軍に対して少数であり、装備も貧弱であったが、ユグノーは果敢に戦い、国王の最強部隊を阻んだ。¹²⁾

「この驚くべき成功はどこから来たのであろうか？栗林があり、森があり、洞穴がある、起伏

に富んだ、険しい峡谷で切り立ったこの地方は、このような戦闘には適していた。カミザールの人々は小道を、空き地を、洞穴をよく知っていた。『新改宗者』も彼らに加担した。そして、カトリックは彼らの復讐を恐れた。」¹³⁾

エミール・G. レオナルドは、国王軍には戦闘の士気が低下しており、その上、このようなゲリラ戦の訓練を受けてはいなかったと述べている。¹⁴⁾一方、ユグノーはその残酷さ、奇矯さにもかかわらず、彼らが深く宗教的であったと言わなければならない。彼らは戦う時も敬虔な宗教心に支えられていたといわれている。週日は激しい戦いをするが、聖日は戦わず、礼拝をささげた。そして、重要事項を決定したり、実行するときは、まず祈禱をした。戦闘におもむく前には神の前にひざまずき、詩篇をうたいながら戦いにのぞんだ。

ジャン・カヴァリエ¹⁵⁾は1681年11月28日、ガール県タヴェルヌに生まれた。豊かな農民階級の出身であった。彼の村の司祭の言うことを聴いていたら、司祭になっていたであろう。しかし、この子供は12才の時、母親に連れて行かれた夜の集会のことが忘れられなかった。セヴェンヌ地方で人々の心を捉えていた預言者運動の雰囲気から影響を受けた。1702年2月、彼は集会で説教をし、逮捕を恐れてジュネーブに逃亡した。そこで宗教教育を受け、小さな説教集を得て、また、多分、戦略の手引きを読んだのであろう。1702年6月、突然、フランスに帰り、彼の同宗者のなかで、きわめて高い評価を受ける。しかし、21才のこの青年は彼を生かす神の霊を深く確信し、聖霊の火のなかにおいてのみ行動するようになる。彼は百人の敵に対して10人であたる天才的な戦略を披露した。同時に、すばらしい組織能力を持っていた。

まず、彼は彼の群れに厳しい規律を課した。賭けをしないこと、日曜日の礼拝を守ること、各人の功績に従って戦利品を分配することなど。カミ

9) Cf. *Ibid.*, p. 173.

10) Cf. *Ibid.*, p. 173.

11) Gédéon LAPORTE.

12) Cf. Raoul STEPHAN, *op. cit.*, p. 174.

13) Jule MICHELET, *L'Épopée huguenote*, p. 267.

14) Cf. *L'Armée et ses problèmes au XVIII^e siècle*, 1958.

15) Jean CAVALIER (1681-1740)

ザールの仲間には、かなりの女性がいた。正規の法律による妻、彼女らは荒野の儀式による妻、あるいは、処女の女預言者であった。この女性たちは、男性に付き添い、洗濯をし、スープを作り、負傷者を手当てをし、戦士たちを励ました。時には、彼女らも戦闘に参加した。厳格なカヴァリエは彼の『覚書』の中で、組織の規律を守るため、様々の犯罪で22名を死刑に処したと述べている。

カヴァリエの指揮下のユグノー軍は、マルセル・パンの資料によると、セヴェンヌ地方を駆けめぐり、国王軍に対して略奪、虐殺をし、恐ろしい残忍な行為をした。国王の軍隊、プログリ將軍²⁵⁾の指揮する部隊を奇襲攻撃し、大量の兵を殺し、自然の中に消えて行った。プログリ自身が指揮をとって、ニーム近郊で作戦を展開したが、1703年1月12日、幾人も将校、下士官、兵を失なった。¹⁶⁾

宮廷はプログリを援護するために、「新改宗者」のジャック・ド・ジュリアン元帥を派遣した。このジュリアンはかつての同宗者に最も残酷な行為をした。次いで、プログリはモントルヴェル元帥と交代した。モントルヴェルはうぬぼれ屋であったが、かなり無能であった。枝の主日、ニーム近郊の水車小屋で、約20名、主として女性が礼拝を行なうために集まっていたが、モントルヴェルの部隊は包囲し、虐殺し、火を放った。この殺害事件はカヴァリエらの激しい反撃を引き起こした。¹⁷⁾

そこで、モントルヴェルは宮廷からの要請を受け入れて、セヴェンヌ地方のプロテスタントの村落を破壊することにした。1万9千5百人が住んでいる466の村落が荒廃した。この作戦はセヴェンヌの人々を激怒させ、ジャン・カヴァリエの指揮する部隊に多くの人が新たに参加した。その後、カヴァリエは数々の勝利を収めているが、1703年12月17日には平野での戦闘でも勝利を収め、1704年3月14日には、竜騎兵60と4百の兵を敗走させた。この敗戦でモントルヴェルは召還されることになるが、彼にとって幸運なことには、

1704年4月14日、国王軍3千名とカミザール千2百名が戦い、カミザールは3分の1の勢力を失った。¹⁸⁾

モントルヴェルの跡を継いだド・ヴィラル元帥は、新しい策略を用いた。ヴィラルは、お人好しで、野心家のプロテスタントの貴族、エガリエ男爵を連れて来た。ヴィラルはエガリエを使って、激しく抵抗するセヴェンヌの人々を甘い言葉で陥れようとした。エガリエはこの地方一帯をめぐり、王は反乱を起こす集会は禁じているが、新しい改宗者が自分たちの流儀で神に祈ることは妨げないなどと言って、人々に話しかけた。この策略はセヴェンヌの人々をユグノー軍から離脱させるのに効果があった。カヴァリエ自身もエガリエ男爵の願いに応じ、1704年5月16日、ニームでヴィラル男爵と会見することを受け入れた。¹⁹⁾

ヴィラル元帥は王の寛大をジャン・カヴァリエに約束し、また、彼をカミザール軍の連隊長にする計画を示して、このユグノーの指導者を誘った。カヴァリエは全く口約束で信仰の自由に関する合意を受け入れた。しかし、国王、ルイ14世は元帥の進言を受け入れず、カヴァリエと腹心の部下をフランス国外に追放するように命じた。カヴァリエはスイスを経由して、サヴォア公に仕え、次いで、オランダに滞在ののち、イギリスの女王の申し出を、軍隊と共にフランスへ入るという強い希望を持って受け入れた。彼は1706年、イスパニアで、ユグノー連隊の隊長をしていて、負傷した。彼は1740年に死んだ。

セヴェンヌの人たちは、今日、ジャン・カヴァリエのセヴェンヌでの戦闘放棄を非難し、妥協せずに最後まで戦ったロランを賞賛している。ロランは彼の部下に裏切られて、1704年4月14日、カステルノ・ヴァランス城で殺された。24才であった。ラヴァネルとカチナは捕らえられて、1705年4月22日、多くのカミザールの人々とともに焼かれた。エリ・マリオンはジュネーブに亡命したが、彼の預言者としての興奮した言動は、よい評

16) Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, pp. 175-177.

17) Cf. *Ibid.*, p. 177.

18) Cf. *Ibid.*, p. 178.

19) Cf. *Ibid.*, pp. 178-179.

価は得られなかった。

1709年に最後の火花、暴動が ヴィヴァレで起こった。アブラム・マゼルは国王軍に1年間、抵抗したが、1710年10月17日、ユゼスの近くで殺された。²⁰⁾ このようにして、カミザールの戦いは終わったが、その英雄的な戦闘はジャン・カヴァリエの戦闘放棄によって1704年5月に終わっている。²⁰⁾

フランス改革派教会は、1910年にカミザールの戦いを記念して「荒野の博物館」を設立した。ユグノーが彼らの根拠地とした、指導者ロランの家がその建物にあてられた。この博物館には当時を偲ぶ多くの記念物が保存展示されているが、その中心はロランの使用した聖書である。それはどの頁も手あかで黒くすり切れており、何度も読まれたことが一目瞭然の聖書である。この他、指導者たちの遺品が展示され、また、当時、迫害されて処刑された大勢のユグノーの名前が石に刻まれて記録されている。この「荒野の博物館」設立の献辞を見ると次のように記されている。

「ここに苦難に満ちた記録がある。暗黒時代に礼拝をささげるため、この荒野に集まって来た人々の記念品がある。これによって迫害時代を覚え、プロテスタント信仰を一層振起させよう。18世紀のユグノーたちは大きな試練にあった。しかし聖書に頼ることによって悲惨な迫害の中でも守られた。最後まで耐え忍びえた秘訣はこの聖書にあるのだ。だから、この『荒野の博物館』の中心は聖書なのだ。この貴重な過去を現在に結びつけよう。その役目を果たするのがこの博物館である。」²¹⁾

「荒野の博物館」の「荒野」の意味は、1つは、この地が実際に辺境の荒野であることからきており、もう1つは聖書的な意味、つまり、試練ということから出ている。フランス・プロテスタント

はカミザールの戦いという試練を深く心に刻みつけ、この過去の体験を現代に生かそうとしているのである。そして、毎年9月の第1聖日には、多くのプロテスタントがこの地を集って、記念礼拝を持ち、聖餐式、洗礼を行っている。

II. 荒野の教会

カミザールの戦い以後、ピエール・コルテーズ、サロモン・サバチエ、エチエンヌ・アルノーらが密かにラングドック地方の人々にプロテスタント信仰を目覚めさせようとしていた。²²⁾ しかし、真にフランス・プロテスタント主義を復興するのはアントワヌ・クール²³⁾である。熱心な同僚たち、とりわけ、10才年上のコルテーズに助けられて、荒野の教会を建てたのは、彼である。アントワヌ・クールは、1696年5月17日、アルデーシュに生れた。熱心なプロテスタントで、裕福な両親は、生れる前から、彼を牧師にしようと願っていた。しかし、父親を4才の時に亡くし、母に育てられた。学校に勤勉に通ったが、家では、聖書とシャルル・ドルランクールの『誠実な魂への慰め』、バックステールの『神の声』など信仰書をよく読んだ。²⁴⁾ 子供の頃から秘密集会に出席し、アブラム・マゼルの説教を聴いた。早くから、聖書を代読していたので、周囲から靈感を受けていると思われていたが、後年、彼は預言運動、天啓説には反対する。彼は自分の村で小さな教会を再組織し、将来、牧師になることを夢見ていた。

当時、フランスはルイ14世の対外戦争で疲弊していた。1713年のユトレヒト条約でイギリスが勝利国となったが、この条約には、ユグノーへの緩和策は何ら明記されていなかった。失望したユグノーたちの中には、戦闘を準備する者もいた。ルイ14世は、1715年3月8日、新しい聴聞司祭ル・

20) Cf. *Ibid.*, p. 179.

21) 激しい迫害のなかで、神への礼拝を守ったユグノーの信仰を記念するために、フランス改革派教会は1910年、カミザールの戦いの指導者、ロランの生家を Musée du Désert (荒野の博物館) とした。以後、毎年、9月の第一聖日にフランス、ヨーロッパ各地から多数の人々が参集し、記念集会が荒野の博物館近くの栗林で開催されている。荒野の博物館はアンデューズから約6キロ、マ・ド・スベランにある。

22) Pierre CORTEIZ, Salomon SABATIER, Etienne ARNAULD. Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, p. 185.

23) Antoine COURT (1696-1760) 全生涯を賭けてフランス改革派教会の再建に献身し、当時の最も傑出した指導者である。

24) Charles DRELINCOURT, *Consolation de l'âme fidèle*, BAXTER, *La Voix de Dieu*,

テリエの示唆を受けて、「自称改革派」を固持する者は、異端再転向者とみなし、そのように罰するという宣言を發布した。

アントワヌ・クールはニーム、ドーフィネ、マルセユで教職者となる訓練を受けた。彼はクロード・ブルソンの思想を継ぎ、非暴力の抵抗を説き、家庭や集会で神にふさわしい礼拝を捧げることを教えた。しかし、その結果を、つまり、兵隊の攻撃、ガレー船、牢獄、死刑を甘んじて受け入れた。

1715年8月21日、国王の死の10日前、アントワヌ・クールは「荒野の教会」、十字架の下の教会を復興することを企てる。彼は、セヴェヌのある納屋にこの地方の幾人かの説教師を集めて、荒野の教会の第一回教会会議を開催した。それはごく小さな会議であるが、狂信的な預言運動に反対して、教会に秩序を回復するための重要な諸決定をした。牧師の選任は厳格であること、女性が説教することを禁じることを明記し、信仰の唯一の基準は聖書であることが決められた。アントワヌ・クールは慎重さ、威厳のための方策を提案した。説教は1時間を越えないこと、献金は貧者のためであって、説教者のためではないこと、教会は権威に服従し、権威のために祈ることを定めた。

摂政がプロテスタントに対し何らかの緩和策をとることが期待されたが、不幸なことに、1716年5月、6月の勅令は、ルイ14世治下のすべての禁止事項を列挙し、集会を禁止した。アントワヌ・クールはそれでもやはり、忠誠を勧め、忍耐を説いた。しかし、密かに集会は続けていた。従って、迫害は続いた。1717年の初め、アンデューズで74人が逮捕され、22名がガレー船に送られ、女性は牢獄に入れられた。非暴力の信奉者であるアントワヌ・クールは、1718年、彼の信者たちが武器をとって説教者アルノーを救おうとしたのをやめさせた。アルノーは1716年1月22日、アレスで絞首刑にされた。²⁵⁾

アントワヌ・クールはコルテーズの賛成を得て、混乱状態にある教会を回復しようとするが、まず「規律」を守ることから始めなければならぬと判断した。そこで、コルテーズはスイスに行

き、チューリッヒで牧師として任職を受け、5ヶ月後にフランスに帰り、クールに一種の試験を課し、そして、1718年11月21日、厳かに牧師に任職した。アルノーがなくなると、ラングドック地方には、有能な人物は2人だけしかいなかった。つまり、アントワヌ・クールとピエール・コルテーズであった。第1回教会会議の説教師たちは皆熱心で、勇敢であったが、彼等の職務のレベルに達していなかった。ところで、バヴィル Bâville はラングドック地方に16万6千人の改革派がいたという。牧師がいなかったので、預言運動が広がり、女性信者の心をとらえた。これらの説教師たちは甘い言葉で話し、涙を流し、聖書の引用に彼らの「天啓」を加えていた。アントワヌ・クールは、ほんの子供の時、女性説教師によって改宗したけれども、「霊的な」異端であり、また、公権力、カトリック、また、外国のプロテスタントに対してさえ、プロテスタント主義の信用を失わせている預言活動、天啓説に対して反対運動を行なった。それ故、第1回の教会会議の決定、つまり、女性が説教することを禁止し、聖書を信仰の唯一の基準とすることを明記した諸規定を1716年から1721年の教会会議において確認している。

しかし、説教師たち全員がよく訓練されていたわけではない。ジャン・ヴェッソンやジャン・ユックは約束事項を守らず、しかし、支持者を持っていた。リュネル、とりわけ、モンペリエでは、常軌を逸したセクトが発展し、ヴェッソンを牧師とした。彼らの儀式は異常で、男女とも奇妙な、そして、金色の紙片のついた服をまっており、宗教の集会というよりは、謝肉祭から帰ってきたような雰囲気であった。1723年4月、ヴェッソンは4人の参加者と共に絞首刑にされ、ジャン・ユックはサン・ポール・ラコストで捕らえられ、やはり、絞首刑にされた。リュネルでは、このセクトのメンバーが捕らえられ、ガレー船に送られ、女性はコンスタンスの塔に入れられた。これが、当時の言葉で言うならば、「狂信派」の結末であった。²⁶⁾

教会を原始教会の純粹さなかで回復することを強く願ったアントワヌ・クールは、1720年末、フ

25) Cf. R. STEPHAN, *op cit.*, p. 186.

26) Cf. *Ibid.*, p. 187.

ランスの信者のために正式に任職した牧師を獲得するためにジュネーブに向かった。しかし、スイスへの、また、オランダへの亡命者も、殉教者のための召命感を持っていなかった。そこで、彼はフランス人青年を牧師に育成するため、神学校設立を思いついた。彼は秘密集会をフランスで継続することを必須のことと確信していた。それは、第1に、神にふさわしい礼拝を捧げることが重要だからであり、第2に、フランスにつねにプロテスタントが存在していることを宮廷に示すことによって、最後には、礼拝の自由と信仰の自由が得られると思っていたからである。だが、カルヴェンの伝統によれば、この礼拝は即興の、しばしば、無教養な説教ではなく、神学教育を受けた牧師によって行われなければならないし、また、先輩の牧師によって任職され、聖礼典を執行する資格のある牧師が必要であった。

確かに、彼の主張はかならずしも外国のプロテスタントから認められているわけではなかった。外国のプロテスタントのうちのある人たちは、ユグノーの集会は法律によって禁止されているから反乱行為であると判断していた。他の人びとは、それらの秘密集会は危険であると主張した。これに対して、アントワヌ・クールは、1つの集会が発見されても、百の集会が敵に知られず行われていると断固主張した。事実、1715年から1723年までにラングドック地方では、7つの集会が襲撃されただけである。この英雄的執拗さがフランスのプロテスタントを救ったと言えるであろう。ラングドック地方やドーフィネ地方のプロテスタントのこの熱心は、徐々にフランス国内に浸透し、ラングドック、フォア伯爵領、ギュイエンヌ、ポアトゥ、サントンジュ、ブルターニュの諸地方が順次目覚めてきた。

このような状況の中では、フランスの全信徒に牧師を与えることが緊急の課題であった。そこで、アントワヌ・クールは1720年末に、フランスのプロテスタントを守るためジュネーブに向けて発ったのであった。彼は雄弁をふるい、スイスの当局だけでなく、イギリスやオランダの有力者の支持を得た。同時に、自ら牧師としての教養を身

につけるために、ジュネーブ神学部の講義を受け、そして、フランスのプロテスタント史を執筆することを計画した。しかし、彼はフランスにおける彼の任務がまだ終わっていないと判断したので、彼は1722年8月、帰国した。²⁷⁾

アントワヌ・クールにはつねに生命の危険があった。彼やコルテーズ、ルヴィエールらの首には賞金がかかっていたからである。1724年5月14日、プロテスタント弾圧のため、王の宣言が出され、衝撃を受けた者は外国に亡命した。暴動の恐れもあった。1724年の教会会議で、牧師や説教師たちは信徒たちに留まり、忍耐するように説いた。1725年の教会会議で、アントワヌ・クールは、教養があり、敬虔で、しかし、かつて、天啓説に少し好意的であったアレスの貴族、バンジャマン・デジュ・プランを、反対意見を説得して「対外国派遣議員」に指名することに成功した。目的は、ガレー船から救うための、また、スイスに神学校を設立するための基金を集めるためであった。アントワヌ・クールはフランスのプロテスタントに健全な牧師を与えるという彼の基本的計画を常に見失わなかった。ジュネーブは余りにもフランスの代理人によって監視されているので、1726年、神学校が設立されたのは、ローザンヌであった。当初、財団は小さく、集められた基金は少額であった。しかし、バンジャマン・デュ・プランの尽力で、この財団は徐々に重要性を増していった。

フランスでは、アントワヌ・クールは、官憲の追求をかわしながら、危険な事業を継続していた。1726年5月16日、ヴィヴァレ溪谷で66年間の中断の後、第1回全国教会会議が開催された、議員47名(牧師3名、教師候補者8名、長老36名)の小さな教会会議であった。アントワヌ・クールは以前、福音のために苦しんでいる人々と宣教活動をする教職者のための基金を創設していたが、今や、王国のすべての教会を連合することに努める。信徒たちの熱心が増してきた。アントワヌ・クールは彼らのうち千人に聖餐を与えた。ニームのロベール司祭の「覚書」によると、全般的な改宗以前と同じ位、カルヴィニストがいると書いて

27) Cf. *Ibid.*, pp. 187-188.

いる。従って、迫害は続く。集会は襲撃され、1728年11月、26才の教師候補者、アレクザンドル・ルゥセルはモンペリエで絞首刑にされた。しかし、殉教の血は一粒の種となった。火はオルレアン、イル・ド・フランス、ピカルディに広がった。²⁸⁾

憲兵の目を逃れて、隠れ家を絶えず変えなければならなかった牧師たちの疲労は大きかった。アントワヌ・クールは、14年間、プロテスタント教会の復興、教会訓練の回復、説教師団の組織、神学校の設立のため熱心に努力した。

フランスのプロテスタントのために、アントワヌ・クールが設立した神学校は1729年には学生はたった6名であった。クールは、これらの学生への援助金のため奔走し、獲得してきた。教室には、ローザンヌのアカデミーから神学者が教授しにやって来た。ローザンヌのアカデミーは、ジュネーブのアカデミーよりも早く、1537年に設立され、フランス語圏における最初のプロテスタントの神学教育機関である。この教授たちは時代の思想に影響されたカルヴィニズムを教えていた。クールは彼らに全面的に賛成というわけではなく、彼自身が荒野の精神を学生たちに吹き込んでいた。アントワヌ・クールは、学生たちの父親であり、相談相手であった。この貧弱な神学校から、70年間に、3百人の牧師が生れた。その中には、ジャン・プラデル、ポール・ラボ、ジャン・ボン・サン・タンドレがいる。²⁹⁾

この間、バンジャマン・デュ・ブランは、ヨーロッパを、とくに、1731年から、駆けめぐり、外国のプロテスタントに対してフランスのプロテスタントへの援助を訴えた。書籍購入のための資金、牧師の俸給、ガレー船からの救助、ローザンヌの神学校のための基金を集めた。

フランスでは、わずかの時期を除いて、1762年まで、迫害が続いた。カトリックの聖職者たちは宮廷を唆し、1730年に再び、ドラゴナード、刑罰が始まった。大多数のプロテスタント、とりわけ、地方のプロテスタントは牧師の前で結婚し、荒野で彼らの子供の洗礼を受けさせた。だから、戸籍

がなかった。しばしば、彼らは死者を隠れて埋葬しなければならなかった。

コンスタンスの塔は1705年7月27日、不屈のセヴェンヌの人、アブラム・マゼルが16人の仲間と共に脱出するため、城壁の銃眼の石を取り除く方法を見つけて以来、女性のための牢獄となった。壁の厚さ6メートルのこの塔の中に30人も収容された時期があった。幾人かの女性は、狂人となったヴィヴァロワズ・イザボー・ムネのように、子供と一緒に閉じ込められた。セヴェンヌ出身のアンヌ・グッテは、生後6ヶ月の娘と共に1742年、投獄された。そして、彼女の夫は国王のガレー船を漕がされていた。マリ・デュランは彼女の兄弟が説教師だったという理由で逮捕され、1730年8月25日以来、この塔に閉じ込められていた。同様の理由でブレスクの要塞に閉じ込められていた彼女の父は1743年、86才でやっと、出獄できた。マリ・デュランが逮捕されたのは、15才であった。彼女はアンヌ・グッテと強い友情で結ばれ、この薄暗く、冷たい塔の中で、仲間を励まし続け、また、密かに外部と文通をして、同信者を勇気づけた。1768年4月14日、53才の時、やっと釈放され、ブシェ・ド・ブランルにある彼女の生家に仲間のアンヌ・グッテを連れて帰った。現在、博物館になっている。これらの女囚たちの一人、寡婦のマリ・フィゾルはこの塔に41年間、閉じ込められ、やっと1768年12月26日に釈放された。³⁰⁾

男性がガレー船の苦役に苦しみ、女性が投獄されている間、十字架の下にある教会はその地下活動を続けた。1730年から1744年は小康状態であった。ミシェル・ヴィアラは高ラングドック地方を駆けめぐり、ピエール・コルテーズは22年間の地下の宣教活動ののち、フランスを離れてチューリッヒに発つまで、フォア伯爵領で職務を遂行した。エチエンヌ・デフェールはベアルン地方で、ジャン・ロワールとアンドレ・ミゴはポアトゥ地方とノルマンディ地方で職務に従事した。ピエール・コルテーズは1730年、ヴィヴァレーで第3回全国教会会議の、ミシェル・ヴィアラは1744年、

28) Cf. *Ibid.*, pp. 188-189.

29) Cf. *Ibid.*, p. 191.

30) Cf. *Ibid.*, pp. 195-196.

低ラングドックで開かれた第4回全国教会会議の議長となった。1744年、改革派教会の指導者を2分する問題が生じた時、アントワヌ・クールが呼ばれ、彼が調停して解決した。1744年8月18日、彼はフランス改革派教会の代表議員に任命され、そして、多くの集会で熱情と平和に満ちた雰囲気の中で礼拝説教を行い、信徒の信仰を鼓舞し、10月2日、彼は再び、ローザンヌに戻った。³¹⁾

この1744年には、フランスのプロテスタントには牧師は33名しかいなかったが、非常に熱心に集会が持っていた。牧師たちは子供に洗礼を授け、結婚を祝福し、礼拝は日中行われた。この大胆さは、プロテスタントにとって、高価な代償を払わなければならなかった。1745年から1752年までの間、再び、迫害の日が燃え上がった。カトリックの聖職者たちの苦情がそれをかきたてた。ドラゴナード、子攫い、墓を暴く行為が再び行われた。牧師たちは信徒に忍耐を説いたが、一部にはその忠告を聞かない者も出てきた。ネールの修道院長が暗殺され、2人の司祭が負傷を負った。³²⁾

1753年、迫害は止んだが、翌年再び始まり、1760年まで続く。この時期の有名な牧師は、1717年、ボルドー生れのポール・ラボーである。1740年、ローザンヌでアントワヌ・クールから彼の子供のように迎えられ、学業を終えた。ジャン・ブラデルもローザンヌに来た。この2人は1743年、帰国し、ニームで牧師の任職を受け、そこで職務に携わって活躍した。

パリでは、富裕なブルジョワ階級のユグノーが、迫害の下にあるユグノーを援助するために銀行を創設する計画を立てるが、実現には至らなかった。ラングドック地方では、事情はかなり改善されていたが、ドーフィネ、ギュイエンヌ、ペアルン諸地方、フォア伯爵領では迫害が続いた。結局のところ、ユグノーの状況は不安定であった。

1762年のカラス事件や1771年のシルヴァン事件によって、世論がユグノーへの寛容な政策を政府に求めるようになる。しかし、大革命によって、プロテスタントはまたまた、苦難の時期を迎え、プロテスタントが、パリ市内において礼拝を始め

ることができたのは、ナポレオンの帝政下、1811年のことであり、最初の改革派教会は、ルーヴル・オラトワール教会であった。

主要参考文献

- Mémoires de Jean CAVALIER* (Londres, 1726: réédités par F. PUAUX chez Payot en 1918), de BASVILLE (1734), de VILLARS (1737), d'Abraham MAZEL et Elie MARION (réédités par Charles BOST en 1931), 12 d'Antoine COURT.
- Raoul STEPHAN, *Histoire du Protestantisme français*. Librairie Arthème Fayard, 1961.
- Emile-G. LEONARD, *Histoire ecclésiastique des réformés français au XVIII^e Siècle*, 1940.
- Un Village d'opiniâtres*, 1938.
- L'Armée et ses Problèmes*, 1958.
- Marcel PIN, *Nicolas Jouanny*, 1930.
- Jean Cavalier*, 1936.
- Madame de Maintenon et les Protestants*, 1943.
- Henri BOSCH, *La Guerres de Cévennes, 1702-1710*.
- M M. HAAG, *La France protestante*, Paris, 1846, 1859.
- Archives Nationales, *LES HUGUENOTS*, 1985.

31) Cf. *Ibid.*, pp. 196-197.

32) Cf. *Ibid.*, p. 197.

The History of the French Reformed Church under the Persecutions (2) —The Battles of Camisards and the Reconstruction of the Reformed Church—

ABSTRACT

Some Protestants, primarily nobles, pastors, scholars, and manufacturers, took refuge in foreign countries. Some converted to Catholicism, but others stayed in France and tried to keep the Reformed faith. Of course, severe persecutions began. These Protestant Huguenots fought against the King's big army and the intense oppression of the Catholic Church. The most famous battle of the Huguenots was that of the Camisards, from 1702 to 1704. During the persecutions and battles, Huguenots maintained their service to God in secret meetings without pastors. Antoine Court, with the hope to reconstruct the Reformed Church in France, created a seminary in Lausanne in order to train French young men as pastors. Antoine Court and his friends continued the difficult efforts for the reconstruction of the church. This goal was realized far later: the first Reformed Church in Paris after the Revocation was Louvre-Oratoire, dedicated in 1812, and authorized by Napoleon I.

Key Words : Huguenots, persecution, reconstruction of the Reformed Church